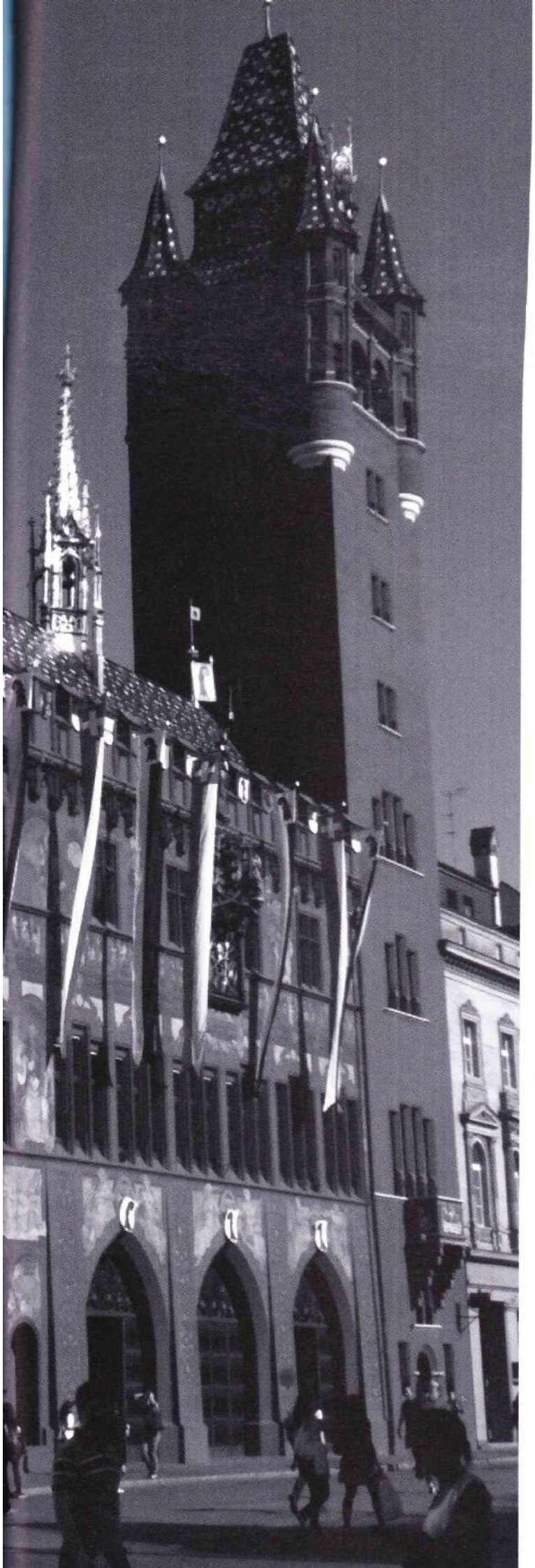


# スイスと日本にかかる橋
## ～バーゼル歌劇場初来日～

**中 東生**（音楽ライター・チューリッヒ在住）
Shinobu Naka

本日バーゼル歌劇場初来日公演《フィガロの結婚》にお越し下さった皆様は、今から丁度150年前にスイス通商使節団が架け始めた日瑞間の橋を、より強固な物にする手助けをして下さいました。1863年4月横浜に着いた使節団は、困難を極めた8ヶ月以上にわたる長期交渉の末、1864年2月、日本にとっては8か国目となる修好通商条約をスイスと締結させることに成功しました。在日本スイス大使館はこれを記念し、2013年秋から2014年夏までの1年を「日瑞友好150周年記念年」として、様々な催し物を準備しています。それに先駆ける形で初来日するバーゼル歌劇場は、日瑞友好年の前夜祭としての大きな役割を果たし、皆様の心の中にスイスへの友情を喚起するきっかけになることでしょう。

スイスと聞くと皆様は何を思い浮かべるでしょうか。アルプス、ハイジ、アルプホルンなど山岳地帯としてのスイスでしょうか、チョコレート、時計などのお土産品かもしれません。あるいは、永世中立国、赤十字、国際連盟本部、世界保健機構（WHO）本部など国際社会の中におけるスイスの役割を思い浮かべる方もいらっしゃることでしょう。

そうしたスイスの北端、ドイツ、フランスとスイス、三国の国境線が交わる重要な地点にバーゼルという街はあります。バーゼルは1501年にスイス連邦に加盟しましたが、それ以前の独立していた歴史が長いためか、バーゼル市民は誇り高い性質をもつと言われています。スイス最古の大学が建てられた街でもあり、550年の歴史を誇るバーゼル大学は、現在でもバイオ化学などの分野で世界の最先端の研究を行っています。

また、市政が建設した最古の美術館が建てられたのもバーゼルでした。そのバーゼル市立美術館にまつわる興味深いエピソードがあります。1960年代にピカソの絵を買おうという動きがあり、スイスが誇る直接民主主義で市民投票にかけられたところ、大多数意見として購入が決定したそうです。それに気を良くしたピカソは、絵を買ってもらう御礼として、

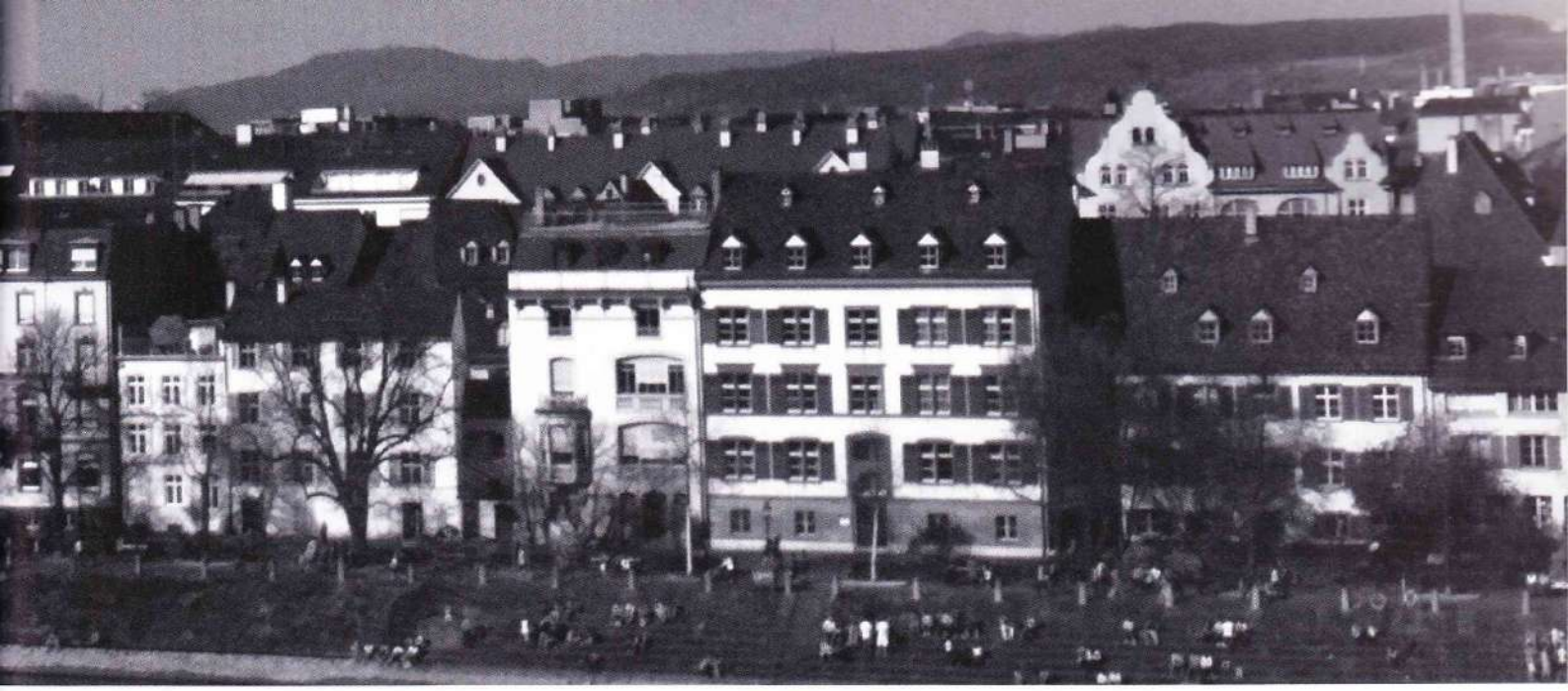
他に何枚かの絵を贈呈したといいます。このような芸術性の高い市民が作り上げたバーゼル市は美術館や博物館がひしめく文化的な街として発展し、現在は時計・宝飾品やアンティーク見本市なども多く開かれています。絵画の展示博覧会ではブラッド・ピットをはじめとするセレブたちを見かけることもあるとか。

こうした文化的背景を背負ったバーゼル市民は、統計によると、一人当たり1年間に文化に費やす金額が一番多いそうです。美術だけでなく音楽教育、研究のレベルも高く、バーゼル音楽院はアカデミーと古楽専門のスコラに分かれており、古楽器研究おいてはヨーロッパ随一の成果を誇っています。

その街の中心地に位置するバーゼル歌劇場は、その名を冠したタングリー美術館でも有名なスイスの現代美術家、画家、彫刻家ジャン・タングリーの「謝肉祭の噴水」に飾られており、市民の憩いの広場にもなっています。その歴史は古く、現在のモダンな建物に建て替えられてからでも40年弱、その前身を含めると180年以上にもなります。そうした劇場の歴史を大きく変えたのが、2006年に劇場総裁に就任したジョルジュ・デルノン氏の存在でしょう。地方歌劇場の1つであったバーゼル歌劇場を、ヨーロッパ中が注目するような劇場へと変えたのです。『オーパンヴェルト』誌上の「年間最優秀歌劇場」に2年連続で選ばれたことを受けて、外国からツアーのオファーが殺到していると言います。フランス、ドイツの他、イタリアのモデナ市立歌劇場やパルマ王立歌劇場音楽祭、そしてエディンバラ音楽祭から招聘の声がかかり、さらに、ナポリのサンカルロ歌劇場音楽祭やパリの秋の音楽祭などからもオファーが相次いでいるとのことです。しかし、それらの計画が実現に向けて走り出したのは今回の初来日ツアーのみ。日本人とスイス人の絆が実を結んだのでしょう。

デルノン氏自身は演出家としても活躍しており、バーゼル歌劇場初来日ツアーに先駆けて、昨年11、12月にびわ湖ホールで上演された、びわ湖ホールとバーゼル歌劇場の共同制作による《コジ・ファン・トゥッテ》の演出を手掛けました。その際に氏は次のように語っています。「《コジ・ファン・トゥッテ》のような、そのまま演出したら、ただの荒唐無稽な作り話になってしまうようなオペラは自分の領域であるけれど、《フィガロの結婚》のような、社会の中で生きる人物像を描き切るには、ゲールデンのような演出家が必要だった」。この言葉からも解るように、本来演劇畑の演出家であるエルマー・ゲールデン氏を口説き落として、オペラ演出家としてデビューさせ実現したのが、今回の《フィガロの結婚》なのです。

バーゼル歌劇場は、舞台装置の保管場所が限られていることもあり、1シーズンのみで公演が打ち切られるのが普通です。でも、この《フィガロの結婚》は2010年3月25日に初日を迎えてから、満員御礼の連続。予定されていた公演が終わった後も追加公演が催され、それでもフィガロ熱は収まらず、翌年に異例の再演。そして初めての日本ツアーを祝して3年目も再演され、沢山の観客に惜しまれつつ、舞台装置は日本へと船出したのです。



当劇場の強みは質の高いアンサンブルにあります。大きな歌劇場は、世界中を飛び回っているようなスター歌手を登場させるため、アンサンブルに力を入れた稽古をする時間が取れないのが実状です。しかし《フィガロの結婚》は有名なアリアがちりばめられており、それを総括しているのが重唱なのです。モーツァルトの天才的才能のなせる技といえるような作曲法で、1つの問題が解決したと思うと、また別の人物が入って来て、別の難題が呈示される…、といったスリリングな状況をアンサンブルで物語っています。ハラハラ、ドキドキさせる重唱の演奏や演技が未熟では、手に汗握るこのドタバタ劇を実現できるはずがありません。

まずは、このモーツァルトとダ・ポンテの傑作を、現代に生きる私達が最も身近に感じられるように演出家が考え抜いたコンセプトがあり(24ページをご覧下さい)、その実現のために指揮者と議論します。楽譜に示されている表情を手掛かりに、それらのコンセプト実現に向けて策を練り、音楽に反するような演出があった時には、解決策を見出し、全体像を造り上げます。その後、演劇的にも優れた要素を持つ歌手達が内面まで掘り下げた演技を追求しながら、稽古を積んでいくのですが、安定した歌唱力も持ち合わせているキャストが選ばれているので、様々なアイディアが生まれても自然に対応できるのです。そうして練り上げられたアンサンブルは毎公演、迸る情熱と共に舞台の上で繰り広げられていくので、観客は、まるで舞台の上でそれらの出来事を傍観しているかのような臨場感を味わえるのです。

クリストファー・ボルダック演じるアルマヴィーヴァ伯爵は、威厳を見せようとすればするほど滑稽に見えてしまう悲しいキャラクターを体現しています。それでも欠乏感を埋めようと、女性に熱を上げます。カルメラ・レミージョとジャクリーン・ワグナーが演じる伯爵夫人はメランコリックだが美しい、夫を愛していても満たされない切ない女性です。マヤ・ボーグとロザンナ・サヴォイアが演じるスザンナは生き生きとしているけれど、策略のために主人を誘惑しておきながら、ワクワクしてしまうような多少の浮気心も持ち合わせているのだそうです。エフゲニー・アレクシエフとユン・カン・リー演じるフィガロは上下関係に屈しない強さと頭の良さを持っており、一番安定している性格だそう。フランツィスカ・ゴットヴァルト演じるケルビーノは、実は演出家が一番好きなキャラクターというだけあって、多彩に移り行く感情と、宝塚の男役顔負けの凛々しい男装と、女装した時の美しさにため息が出るほど。憎めないマルチェッリーナと皮肉屋でも頼れるバルトロ、変態気味のバジリオと、登場するだけで何もしないのに笑いを誘うおかしなアントーニオ、伯爵が追いかけるのが理解できるほどの美少女バルバリーナにおとぼけの公証人クルツィオ…。そして日本人も二人含まれている個性豊かな合唱は、「どんな厳しい練習日程でも笑いが絶えず、お芝居をするのが楽しくて仕方がない国際色豊かな大家族」というコメントの通りの芸達者ゆえに、多くの演出家が再共演を申し出るといいます。オーケストラは地に足のついた若手指揮者ジュリアーノ・ベッタに率いられるバーゼル・シンフォニエッタ。同楽団はザルツブルク音楽祭にも招かれる実力派揃い。

このような若い力に漲る楽しい公演を是非満喫していただき、お気に召されたら、いつの日かバーゼルでお会いしたいものですね。